52. 肝細胞癌の骨シンチグラフィの検討

大草 昭彦 熊野 町子 有田 繁広
播野 賀子 大西 卓也 松本富美子
馬淵 順久 中川 賢一 藤井 広一
浜田 辰己 石田 修 (近畿大・放)

肝細胞癌は予後不良の疾患であるが，近年，総合画像診断法の発達・普及により早期診断がなされ，早期より積極的な治療が行われている．その結果，生存期間が延長し，それに伴い骨転移症例も増加する傾向がみられる．そこでわれわれは昭和62年4月から昭和63年3月までの1年間に肝細胞癌と診断された37症例にスクリーニング検査として骨シンチグラフィを施行し，その有用性につき検討を試みた．37例中骨転移症例14例，疑陽性3例と37.8%の検出率であった．そのうち多発性9例，単発性8例であり，Sensitivity 100%, Specificity 87%の結果が得られた．骨転移部位は肋骨(23.3%)，胸椎(23.3%)，腰椎(20.0%)と肋骨・椎体に多く認められ，四肢骨・頭蓋骨には少ない傾向がみられた．肝細胞癌の型および進行度，性別，年齢，α-FP値等と骨転移との相関は認められなかった．

肝細胞癌の骨転移は諸家の報告では1.6%～20.0%である．われわれの結果では37.8%と高率に骨転移が疑われたが，骨転移症状の認められない症例がほとんどであった．

以上の結果より，肝細胞癌において，骨転移のスクリーニング検査として，骨シンチグラフィは有用であると考えられた．今後，さらに症例を重ねて検討を試みる．

骨シンチグラフィが有用であった症例を供覧した．

53. 胃癌の骨転移について

日野 恵 伊藤 秀臣 山口 晴司
才木 康彦 羽渕 洋子 大谷 雅美
木村 裕子 宇井 一世 池窪 勝治
(神戸中央市民病院・核)

胃癌は骨転移の頻度が低いため注目されにくく，これについての詳細な報告はきわめて少ない．われわれは昭和59年から62年までの4年間に骨シンチグラフィを施行した胃癌患者のうち，骨転移の有無の判明した73例について検討した．

73例中18例(25%)に骨転移が認められ，男性では46例中13例(28%)で，40～70歳代に分布し，女性では19例中5例(19%)で，若年者に多い傾向があった．早期癌および進行癌のBorrmann I, II型では骨転移は認められず，Borrmann III, IV型で多くみられた．手術所見との比較では，漿膜および腹膜浸潤度とはあまり関連がみられず，リンパ節転移との関連が強かった．胃癌の組織型との比較では，乳頭腺癌1例，管状腺癌2例，低分化腺癌6例，印環細胞癌5例に骨転移がみられ，分化度の低いものに転移の多い傾向がみられた．骨転移の部位では脊椎，肋骨，骨盤が多く，骨転移陽性者は他の臓器への転移も多い傾向がみられた．骨シンチグラフィの所見から，骨転移の様式は3つのtypeに分類できた．転移が1つの骨格系に限局するlocalized type 3例，2つ以上の骨格系にわたるmultiple type 11例，central boneにび漫性に浸潤するdiffuse type 4例である．multiple typeではX線写真で溶骨像を呈するものが多く，胃癌組織像との比較では，11例中6例が低分化腺癌であった．diffuse typeでは，骨硬化像が優位であり，4例中3例が印環細胞癌であった．骨転移と血液化学所見との検討では骨転移陽性者で血清ALPが有意に高値を示したが，血清Ca, P, およびCEA値と骨転移の有無との間には明らかな関連を認めなかった．

54. 副甲状腺機能亢進症のDPAによる骨塩量測定

岡村 光英 小泉 義子 井上 剛志
福田 照男 越智 宏暢 小野山靖人
(大阪市大・放)
萩原 聡 三木 隆之 西沢 良記
森井 浩世 (同・二内)

副甲状腺機能亢進症(HPT)の骨脱灰の程度の判定にdual photon absorptiometry (DPA)を用い，全身骨，頭蓋骨，腰椎の骨塩量を測定した．対象は副甲状腺摘出術または亜全摘術(PTX)前に検査した原発性HPT 6例(全例女性)，続発性(腎性)HPT 14例(男性6例，女性8例)と，PTX後のみ検査施行の続発性HPT 10例(男性7例，女性3例)である．検査項目はDPAによる全身骨，頭蓋骨の骨塩量(bone mineral density: BMD)，腰椎L_3のaverage areal density (L_3 AAD)測定と，single photon absorptiometry (SPA)による橈骨骨塩量測定である．

Presented by Medical*Online